

# 世界文化と民族文化

中 村 元

《現在の日本における問題》かつて世界には種々なる民族の文化が存在していた。そこでは複数の文化が存在していたのである。ところが今日では世界が一つのものとなつて來つた。つあるために、一つの單位としての世界文化が問題とされるようになった。そうしてそれとともに單數としての世界文化と複數としての世界文化との關係が問題とされるようになったのである。

現在わが國の知識人の間では、世界文化とは西洋文化のことであるという見解が支配的である。約四十年前に「世界大思想全集」という大規模な叢書が計畫されたときには、東洋思想關係のものが一冊か二冊加えられていた。しかし最近刊行されつつある大規模な同種類の叢書においては、東洋思想關係のものはすがたを消してしまつた。ここでは世界思想とは西洋思想のことにほかならぬと考えられているのである。

《西洋文化の普遍性の主張》なるほど最近代における西洋民族の世界支配の實現とともに、世界の單一化が成立したか

のごとくに常識的には考えられている。政治的にも經濟的にも西洋から孤立した民族あるいは國家が存在しえないということはいうまでもない。そのほか學問・藝術などの領域においても、西洋文化の影響は決定的である。世界が單一化したか、それはまた同時に西洋化したのであると考えられる所以である。しかしながら世界の單一化ということは、物質的自然にはたらきかけそれを支配し利用するという面において顯著なものであつて、言語・道德・宗教・藝術・習俗などの面においては、各民族の精神的習性というものは、なかなか變改され難い點も存する。たとえば、インドは一五世紀末に西洋人が渡來してから、ついに西洋人によつて支配統治されたのであるが、かれらの支配統治が巧妙であつたのにもかかわらず、キリスト教徒は約六〇〇萬人であり、全人口の六〇分の一の程度にすぎない。そしてそれはしかもヒンズー社會からの放逐者とか賤民などが主である。大多數の民衆は太古さながらの傳統的信仰を信奉しているのである。隣國のシナでも、少

なくとも中共の支配以前には、事情はほぼ同様であつた。東洋の諸民族が西洋の思想ないし文化の影響を受けても、容易にその思惟方法ないし思惟傾向を變革しない面があるということは、單に東洋人の後進性とか停滞性として片づけることのできない問題である。

東洋人あるいはその文化は、決して全面的に停滞していたり、全面的に後進的であるのではない。ある場合には西洋と平行して進歩している面がある。ある面においては、世界の主要な諸民族は共通の進歩過程をたどっているのである。共通の進歩の過程は、宗教・道徳・社會制度・政治組織などについても認められる。そして世界が同一方向に向かつて進みつつありながらも、しかも民族的區別は消失しないのである。そうして民族的區別の存續する限り、西洋民族ないし西洋文化なるものも依然として特殊者として考えられねばならぬ。

《東洋思想とその普遍性》西洋化がすなわち世界化である」と主張する人は次のような見解をもつている。——東洋の諸文化は、結局西洋文化に從屬するものである。東洋人のものもろの思惟方法の特性は、結局、西洋人の思惟方法のそれによつて克服さるべきものである。西洋の文化は普遍性をもつが、東洋の文化は普遍性をもたない、と。しかしながら普遍性をもちえないということは、いつたいどういう意味なのであろうか。近代西洋で起こつた自然科學的認識あるいは技術

のようなのが、容易にしかもほとんどそのままのかたちで理解・攝取されるということは、當然である。しかしその他の文化領域に關しては、西洋の文化的所産ならば、すべて普遍性をもちえて、これに反して他の諸民族の文化的所産はすべて普遍性をもちえないということが、はたして言いうるのであろうか。われわれが人類の歴史を通觀してみると、すでに古代において東洋の思想が西洋の思想に影響を與えたあとをいろいろと認めることができる。近代になると、翻譯を通じてではあるが、東洋思想が西洋にやや詳しく知られるようになった。それ以來、東洋思想がフランスおよびドイツの思想形成に及ぼした影響のあとは、相當に著しいものがある。

またかりに、いわゆる東洋内部に限つてみても、過去には偉大な文化交流が行なわれた。佛教はほとんど全アジアに傳わつた。儒學が日本の現實生活をどこまで規定したかは、なお研究を要する問題であるが、ともかく過去の日本の現實の社會生活にある種の規制力をもつていたことは疑いない事實である。普遍的自覺をもたせた教説に、どうして普遍性がなかつたと言いうるのであろうか。

《日本文化の世界性》では今後の新しい世界の建設において、日本人の文化はどのような位置を占めるものであろうか。《美的直觀と思想體系》日本人が美的直觀的な生活形成力にすぐれていることは、自他ともにゆるすところである。日

本の繪畫・彫刻・建築・庭園などは、その價值と意義とが世界的に認められ、諸外國においてもその影響のあとが顯著である。ひとたび海をこえて飛び立つて見るとすぐわかる。ハワイにも、サンフランシスコ郊外にでも、山水泉石をしつらえ、石燈籠をおき、石橋を模した日本庭園がいたるところに見られる。ある學者の庭に招き入れられたら、純日本式の庭園があつたのを見て驚ろいた。ただしその材料は全部カリフォルニアのものである。ところで案内してくれた哲學教授がその庭園を批評して、「ああ、全くモダーンだ!」(Quite modern)といつた。平安朝の様式でも海を超えると「全くモダーン」となるのである。

ホテルにもショージ(障子)・スタイルのものが少なくない。ホノルルの工場ではこの頃ガランとして殺風景な廣い作業場を、優雅なショージ・スタイルのスクリーンで仕切つてみたところが作業能率があがつたという。

また日本の文藝のうちでは特に俳句に對する興味が高まり、俳句についての英文の解説書はあちこちの書店に見られる。

ところが日本人は反對に抽象的體系的なものごとを考えるのは、きわめて不得手であつた。日本は昔から體系的な哲學に乏しいし、論理學は日本の精神的地盤には育たなかつた。インドの論理學である因明(いんみょう)も、日本に移入さ

れてからは、いつのまにか訓詁注釋の學になり、はては寺院における法會のアクセサリーとしての儀禮になりはてしまつた。

だから視覺に訴える日本の文化の意義が國際的に認められるようになった今日、なお、日本の思想體系が世界に認められるというところには至らない。日本の宗教や思想は、歐米諸國はおろか、近くのアジア諸國にもてんで知られていない。——ひとつには言語の障壁が大きいのであろうが。わずかに一部の禪の思想が知られている程度である。

《日本史上の事例》日本は野蠻人の國だという誤解がまだどこかに残つている。「日本人がやつて来て、あちこちでサムライをやつた」といつて、フィリッピン人が手をあげて、人を切るまねをしたのを思い起こす。最近「忠臣藏」の映畫が海外でも評判になり、その美しさが賞讃されたにもかかわらず、あるアメリカ人の學者は、「どうもあまり血なまぐさくて……」、と批評していた。これが、日本民族一般が外國人に與えるすがたなのであろうか。

しかし過去の事實はむしろ正反對であり、かつて王朝時代には佛教の慈悲の理想にもとづいて四百五十年の長きにわたつて死刑廢止が行なわれたような、愛情にみちた政治を行なつた民族であつたということを、外國人はてんで知らないし、當の日本人さえも忘れてゐる。

ところで日本人の思想というものは、世界性をもたないものであるか。他の國々や民族には受けつけられぬような性質のものなのであろうか。

たとい日本人が抽象的體系的な思索において拙劣であろうとも、この島國に二千年以上にわたつて日本民族が生活して來たということは、まぎれもない嚴とした事實である。生活して來た以上は、必ずや實踐的に理解されていた思想があつたにちがいない。

現在のいわゆる「知識人」の多くの人々によると、日本人の思考様式ははなはだわけのわからぬものであり、西歐の考へかたを取り入れることによつて除去されるか、あるいは改革さるべきものであるといわれている。特に先年の敗戦という決定的な打撃は、こういう主張をますます優勢ならしめた。基準は西歐におかれている。この傾向はいわゆる知識人の間で特に顯著である。

《近代文明の盲點》しかし西歐の思考様式をとり入れるといつても、具體的には何を基準とするのであろうか。同じ西洋でも、資本主義諸國のそれと共產主義諸國のそれとでは氷炭相いれない面がある。また西側陣營の諸國のうちには、互いに異なつた思想的立場をとつている人々が對立していて、相いれない。だからわれわれ日本人としては特殊な思想的立場をとる人々の意見をただ盲目的に採用するわけにはゆかない。

いのである。

のみならず近代西歐文明が一つの行き詰まりに直面している。押しつぶされそうな壓迫感からなんとか解放されたいともがいてゐる。近年歐米諸國でヒンズー教や佛敎や禪の研究が盛んになり、まるで一種の流行と化したのも、かれらが自らの文明の危機をまざまざと感じとり、何かしら異なつた文明から危機打開の手がかりを得たいともがいてゐるからにほかならない。

近代機械文明の發展は喜ばしいことであり、大いに歡迎すべきである。それによつてどれだけ人間の生活が安樂で便利になつたことであらう。身體を勞することもはるかに少なくなつた。しかしそれとともに他面では恐ろしい危険が忍びよつて來てゐるのである。

醫學の進歩によつて、今日ではもうたいの病氣がなくなるよになつた。その先端を行くアメリカでは、不治の病は段々となくなつて來たので、いまいちばん力をいれているのは、癌と小兒痲痺の退治である。それもいつかは治癒し得るようになる日が來ることであらう。しかし別の面で恐ろしい影響があらわれて來た。それは精神病の増加である。これだけは、近代醫學をもつてもなかなか治癒しがたい。そこで、きちがい病院だけがぞくぞくと増設されてゆく。

《機械文明の缺陷》これは近代文明にどこかまちがつたと

ころがあるのではないか、こう考える識者は思いあまつてヨ  
ーガや禪に解決をもとめようとする。西洋の哲學教授たちは  
職業化して舊來の傳統を墨守してこういうものを問題にしな  
いが、精神醫家・精神分析家は實際上の必要に迫られて、い  
ろいろと苦心研究している。總じてノイローゼ患者はある種  
のコンプレックスをもつているから、それをたたきのめすの  
には、意表外な態度に出る禪の問答が示唆を與えるのである。  
カトリックの坊さんまでが、このごろは盛んに禪を研究して  
いると、ドイツの神父さんが報告している。かれらは信徒の  
悩みを聞き、解決を授けねばならないから、そのために參考  
に供しようとするのである。

近代機械文明は欲望の充足を容易ならしめる。そこで欲望  
のあくことなき充足がたたえられ、欲望の禁過は惡とみなさ  
れる。消費は美德であるといわれる。この傾向がたかまる  
と、行動にブレーキをかけるものがなくなる。家庭では各個  
人がほしいままに行動するために、家庭が破壊され、離婚が  
多くなる。アメリカではだいたい結婚が三つあれば、離婚が  
一つあるという割合である。このように家庭が破壊され易い  
ということとは好ましいことではないといつて、識者は憂慮す  
るようになった。そこで若干の青年たちは日本の家庭を理想  
化してえがき、日本の女性の美德が讚嘆されるようになって  
來た。日本の家庭のありかたには當然佛敎の精神的感化があ

ると考えられる。

また文明諸國において犯罪が決して少なくならない。大都  
市において凶惡な犯罪が行なわれる。青少年の非行も増加し  
てゆく。豊かだからとて、犯罪がなくなるとはいえないので  
ある。そこで人生に絶望した人々は、この世をあきらめて自  
殺するようなことが起こる。若干の文明國において、しかも  
生活保障の行きとどいた國において自殺率が高いのは、その  
ためである。思想的にはニヒリズムが支配的になつて來る。

西歐文明にはぐくまれた人々が、決して自分らの文明に満  
足していない。ある人々は恐ろしく批判的である。かえつて  
東洋の文明になんらかの解決を求めようとしている。それは  
單なる手さぐりか、あがきであるかもしれない。

東洋思想の影響がすべて好ましいものであるとは断定し難  
い。近年顯著に知られるようになったピート族の理論的根據  
とされているものは、實存主義と禪とである。かれらの行動  
は識者のひんしゆくを買つている。しかしともかくこういう  
ところはまだ東洋思想の影響があらわれているという事情を  
考えるならば、われわれは、われわれの祖先から受けて傳え  
て來た思想を、世界的視圈から反省し、評價し直してみる必  
要があるのではなかるうか。

《日本人の知慧》日本人の間では古來他人に對する思いや  
りが強調され、連帶性の意識が強い。これに對して西洋人は

概していうと自我意識が強く、自分の義務をよく守るが、また他方では自分の権利とか自分の利益になることなら強硬に主張する傾向がある。日本人乃至東洋人の間では「和を以て貴しとなす」ということが、大昔から實踐的に理解されて来た。「喧嘩兩成敗」ということが、日本人には體験的に自明のこととして理解されているが、西洋人にはなかなか理解されがたいものであつた。「正は正であり、不正は不正ではないか。それなのに兩成敗とはとんでもない話だ」という。東西にとつてこのような區別の起こつたわけは、西洋人の倫理がもともと遊牧民や航海者のそれから出發し、移動可能な環境と常に變化する人間關係を前提としていたのに、日本乃至東アジアの倫理は定住的な農耕社會のそれから出發して来たところに根ざしているのである。日本人の行動様式を一括して論ずることは困難であろうが、この風土に成立し佛教的な協和精神によつてはぐくまれた倫理はまさにこのようなものであつた。

日本人の生活の知恵からにじみ出たこの倫理は、今後の世界において大きな意味をもつと考えられる。

過去の世界のように、西洋人が他の地域に自由に侵出して植民地をつくり得た時代には、鬭争のモットーで押しとおすことができた。ところが今日では、機械文明の進展の結果、世界はますます小さくなり、國々も、人々も、緊密に結びつ

いて生活するようになった。もはや過去の時代のような放恣は許されない。地球の表面全體が一つの緊密な社會を構成するようになつた。こうなると世界的な規模において「和」の倫理が要請されることになる。

國際紛争が起こつた場合に、當事國双方に言いぶんはあるであろう。しかし今日では「戦争」ということ自體が最大の罪惡なのである。そこで平和ということが至上の要請とされるのである。

このことは一つの國の内部についても言える。アメリカ人は總じて義務をよく守るとともにまた權利を主張する傾向が強いので、何か事があれば訴訟を起こす傾向があつたが、今日ではそれをやめて仲裁にたよる傾向が強くなつた。特に會社にしてみれば、訴訟に金と暇とを使うのはバカらしいからである。

こういう點について言えば、東洋人が昔から實踐的に理解していたことが、いまでは世界的な意味をもつようになつたのである。

ある種の知識人は、日本に宗教的な軸がないということをも批難する。日本人に宗教的な反省が弱いということは確かに缺點の一つであるが、西洋的なドグマ中心の宗教がないということであるならば、それはむしろ日本の長所である。西洋では宗教の對立のためにしばしば悲惨な戰爭を起こしたし、現

在でもそれが離婚の原因となつてゐるほどである。ドグマ中心の宗教ならば、むしろ無いほうがよい。ドグマをこえたところに眞の宗教がある。宗教の生命は教義や神學のうちにはなくて、愛情の實踐、慈悲の行のうちにあるという確信は、古來東洋人のいだいていたものであり、現在アジア諸國はいうにおよばず歐米諸國でも宗教界は一步一步その方向に向かつてゐる。インドに由來するラーマクリシュナ・ミツシヨンの運動はそれであるし、アメリカのパースの哲學もそれを主張してゐる。

《むすび》 日本人が祖先以來體驗的・實踐的に理解してゐたことが、現在の世界的視圈において検討されるならば、新たな生命をもつて生かされるものである。——もちろん捨て去らねばならぬものも少なくはないのであるが。

いま東西文明の總合が問題とされ、あるいは資本主義と共產主義の對決が論ぜられてゐる。これを解決する道は、教義だのイデオロギーのような化石化したものからは出て來ない。そういうもののかつて作り出した根底であるところのわき出る泉のような人間の生活の中から出て來る。特に日本の知識人は西洋のなんらかの思想體系を基盤とし、われわれの具體的人間生活を無視してものを言つてゐる傾向がある。與えられた思想を盲目的に基準とすることをやめよ。人間の生活に即して考えよ。そこに今後の世界においてわれわれ日本

人の進むべき道が見出されるであらう。

それは決して日本の文化を全面的に肯定することではない。日本の文化というものは複合的であるから、それを分析して個々の面について批判を行なわねばならぬ。日本の精神文化の軸となつて來た佛教についても、それを全面的に肯定するのではなくて、種々なる局面について適切な分析解明を施して價值批判を行なうのでなければならぬ。われわれ學徒は、從來の研究が價值批判の面において薄弱であつたということを率直に反省して、新たに再出發をなすべきであらう。

## 新刊紹介(6)

石田瑞麿 「日本佛教における戒律の研究」

第一章 鑑眞渡來以前の戒律

第二章 鑑眞の戒律

第三章 最澄の戒律

第四章 最澄後の圓戒

第五章 鎌倉時代における戒律

A5 本文 五五九頁 索引二八頁

在家佛教協會刊 定價 一、五〇〇圓